

Title	五井蘭洲『中庸首章解』翻刻・注釈
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂研究. 2016, 7, p. 65-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60527
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

五井蘭洲『中庸首章解』翻刻・注釈

湯 城 吉 信

はじめに

五井蘭洲『中庸首章解』は、江戸時代の儒者五井蘭洲が、漢文を解しない初学者のために『中庸』第一章の意味を和文で解説した啓蒙書である。同書的重要性については、つとに陶徳民氏が指摘している（『懐徳堂朱子学の研究』大阪大学出版会、一九九四年、三五頁）。

『中庸』は抽象的なことが書かれているので初心者のための書ではないと言われる（序でも言う）。その『中庸』をあえて和文で一般向けに解説した（丁寧に振り仮名・読点まで付けられている）のは、人々に道徳を行う根拠を納得させるためであった。蘭洲は、天人一貫の道理——すなわち、道徳は天から賦与された自然の摂理であること——を民衆に理解させることが教化の根本だと考えてい

た。そして、それを体得しなければ、道徳を行ってもただ表面的に行うだけに終わると考えていた。蘭洲はその道理を「中庸天命性図」*という図にも表しているが、本書はその解説書としても役立つ。

『中庸』については、懐徳堂学派では中庸錯簡説が有名であるが、そのような学術的観点以外に、教学的観点から重視されていたという点も忘れてはいけない。懐徳堂学派には、中井竹山著『蒙養篇』、加藤景範著『かしまものがたり』『民間さとし草』*などの啓蒙書があるが、この『中庸首章解』はそのような啓蒙書の一つとしても注目される。

『中庸首章解』は崩し字の和文で書かれているため現代の我々には読みにくいことを考え、本稿ではその翻刻を行い、合わせて注釈もつけた。

【注】○「中庸天命性図」 図自体は残っていないが、五井蘭洲『中庸天命性図解』（大阪府立中之島図書館蔵）に詳しい記述がありその様子を推測できる。拙稿「五井蘭洲『中庸』天命性図」について」（二松学舎大学『日本漢文学研究』十一号（二〇一六年三月刊行予定）にて発表予定）を参照されたい。○『民間さとし草』拙稿「加藤景範『民間さとし草』の思想―その学問観・学者観を中心に」（『中国研究集刊』五三三号、二〇一一年）、および拙稿「加藤景範『民間さとし草』翻刻・注釈」（『懷徳堂研究』三三三号、二〇一二年）を参照されたい。

〔テキスト〕

・大阪府立中之島図書館本を底本とし、解説しにくい場合のみ大阪大学懷徳堂文庫蔵の写本を参照した。両本は、丁替わりも振り仮名もほぼ一致するが、振り仮名は中之島図書館本がやや多い（懷徳堂文庫本は当たり前にわかる振り仮名は省かれているらしい）。両本の瑣末な違いは一々校勘せず、懷徳堂文庫本の方が情報が多い場合に絞った。

*両テキストについて

中之島図書館本は、題箋に『中庸首章解 五井蘭洲先生著並書』と書かれている。若干見せ消ちなど補訂が見

られるものの、丁寧に書かれており、定本として清書しようとしたものだと思う。大阪大学懷徳堂文庫本は、本文の前に、中之島図書館本にない「蘭洲五井先生著」という語句が見える。蘭洲の自筆でないことは確かであろう。字体も中之島図書館本に比べて淡泊だが、くせがある。中之島図書館本と葉数は一致し、字の配置もほぼ似ているものの、字体には異同が多く（「ある」↓「有」など）、中之島図書館本（が定本だとするとそれ）をそっくり似せて写そうとしたものではないことがわかる。

【底本の書誌情報】

縦二五・五cm×横一七・七cm

分類番号：1842/30

受入印：大阪府立図書館、昭和廿一年十二月九日、157683

全三十二葉。無郭無界の紙を使用、每半葉十行。

〔凡例〕

*漢字は通用字体に改めた。

*読点は基本的に原文に従いつつ、読点と句点に分けたが、現代の感覚でわかりやすいように（誤解を招かないように）変更した箇所もある。

*踊り字はかなに改めた。訓点中の「コト」の合字も「コ

ト」に改めた。

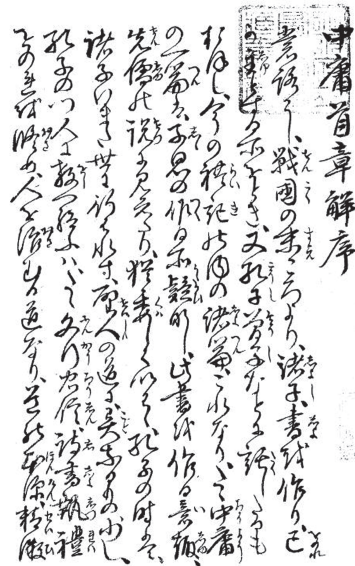
＊書名には書名符号『』を、引用部には引用符号「」を付けた。

＊濁点は原文ではあまりないが、適宜補った。半濁音（ぽ）など、小文字（「いっ」など）も原文ではないが表記を改めた。

＊振り仮名は基本的に原文どおりだが、小文字は適宜用いた。ただし、振り仮名というより注（字解き）の場合もあり、送り仮名と重複していたり漢字の左につけられていたりするので注意が必要である。漢字の左に仮名がある場合は（左…）と記した。

＊丁数は、丁の裏の袋綴じの下に書かれているが、下が切れている数字が多数ある（十二、十三、二十二、二十三、二十六、二十八↑右部が見えない）。また、十三葉に当たる丁が二葉あり、また十八葉と十九葉の間に丁数の書かれていない丁があるため、書かれている数字では全三十丁だが、実際は三十二丁ある。本稿では、実際の丁数を記し（表はa、裏はb）、書かれている丁数（切れているものは推測）は後の（ ）内に記した。

図一 『中庸首章解』冒頭（中之島図書館本）



1 a

中庸首章解序

もろこし、戦国^{せんごく}の末^{すえ}ころより、諸^{しよ}し、書^{しよ}を作り、己^{おのれ}が主^{しゆ}とする所をととき、又孔子^{こうし}、曾子^{そうし}などに託^{たく}したるもおほし。今の『礼記^{らいき}』の内の諸篇^{しよへん}、これなり。ただ、『中庸^{ちゆうちゆう}』の一篇^{いちへん}は、子思^{しし}の作る所^{つくるところ}、疑^{なげ}なし。此書^{このしよ}を作る意趣^{いしゆ}、先儒^{せんじゆ}の説^{せつ}に見えたり。猶^{なほ}委^{あづか}しくいはば、孔子の時^{とき}は、諸子^{しよし}いまだ世^よに行^いはれず、聖人^{せいじん}の道^{みち}に異なるもの少し。孔子の門人^{もんじん}に教^{おし}へ給^{たま}ふは、ただ文行^{ぶんかう}忠信^{ちゆうしん}、詩書^{ししよ}執^{しつ}礼^{らい}、をのれを修^{おほ}め、人^{ひと}を治^{おさ}むる道^{みち}なり。道^{みち}の本源^{ほんげん}、精微^{せいび}

1 b

蓋（左…ふかき）、形して上なるの道は、中人已下の人の及ぶべきならねば、大かたは告る事なし、これも亦これによらしむる*の類なるべし。ただ、顔子、閔子、曾子、子貢如きには、かならず告給ふべし。此事又『易伝』を作り、寓し置しめし給へり。双眼を具せん人は、此中より見出すべし。不慧なる人は、唯易のことを説りとのみ見過すなり。それ道に二端なし。孝弟忠信、礼楽射御のたぐひ、皆これ道の本源より出づ。これを人事なりと蔑視し、別に心法ありなど思ふは、道の一貫なるをしらざるなり。道の本源は天にあり、人の本源は性にあり、人事物

【校勘】○ぐ 懷徳堂文庫本「そなへ」。○ふゑ 懷徳堂文庫本は、さらに字の左に「おろかなる」と振り仮名がある。

【注】○これによらしむる 『論語』泰伯篇の「民可使由之、不可使知之（民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず）」を言う。

2 a

則は性命の条目と心得べし。子貢の語に、「夫子之文章可_二得_テ而聞_一也、夫子之言_三性与_二天道_一、不_レ可_二得_テ而聞_一也」とあるは、これを聞れたるよりいへるなり。此

人_一家_上六年の功夫*も、ここに在べし。然るに、子貢も、

孔子の意と一なるにや、これを説れたる言、後世に聞えず、あれども伝らざるにや。一貫の説は、曾子も子貢も聞れたれば、曾子は必_レ子思にも伝へられたらん。『中庸』一篇は、ただ是性命一貫の旨を説述られたり。遠くは、堯舜執中の道*も、皆是事にて、聖々賢々相伝へ給ふのみ。子思の時に至りて、諸子漸出来れば、後世に至り、聖をさること遠く、愈道の

【校勘】○つかうへ 懷徳堂文庫本「つかのうへ」。

【注】○家_上六年の功夫 子貢が孔子死後、墓の傍らに庵を結び通常の倍の六年の喪に服したこと。『史記』孔子世家に見える。「唯子貢廬於冢上、凡六年、然後去。」○堯舜執中の道 『書経』大禹謨篇の「允執_二厥中_一」を言う（26 a、29 aに後出）。

2 b

本源をとり失ふものあるべきと、おそれて、やむことを得ず此書を作り、孔子にかはりて説あかせり。ゆへに、開卷（左…まきのはじめ）第一義に、天命の性をときて、天人の理をあかし、終篇*には*、無_レ声_無臭を説て、又、天に帰す。是ただ向上をよるこび、虚見に馳せ、隠れたるを求るにあらず。皆、実理なり。実理とはいかなるをいふや。天あり、地あり、天地あれば万物あり。天地

の天地たる所は、渾然たる太極にて、人の智慮の及ぶところにあらざれば、言語にのぶべくもあらず。男あり、女あり、男女あれば子孫あり、男女の男女たる所は天にあり。天は無形無色にて、唯其変化の

【校勘】○終篇 懷徳堂文庫本には「まきのおはり」という振り仮名がある。○には 懷徳堂文庫本は「かは」に見える。

3 a

妙につきて、其跡を見る。昼となり、夜となり、冬となり、夏となる。日月の宇宙をてらし、火のあつく水のさむく、人は善をそなへて、よきをよしとするゆへ、あしきをあししとす。鳥獸昆虫に至るまで、生育の道をしり、上におます人は、政をとりて下を治め、下に居る者は、事をつとめて上をうやまふ。孝は君に事へて忠となり、忠は親につかへて孝となる。有はもとより有にて、無と見るも即有なり。生はもとより生にて、死と見るも即生なり。有は無の有にて、生は死の生なり。神は人の無にて、人は神の有なり。鳥は雲に飛び、魚は水をよくよく。万億年昔の

3 b

天地人のさまも、即今の天地人のすがたなり。すべて目をひらき見る所、皆、自然のありさまにて、少しも人の

手をつくる所にあらず。これを実理といふ。此実理、四方八隅、およそ人のすむほどの国土、皆かくの如し。この外に、さらにあやしむこともなく、又、疑ふべきこともなし。此実理をしらぬ人は、見ることに迷を生じ、我身の中に至りて貴き性あるをわすれ、中正の道に随ふことあたはず。それ元來、道に高卑の別なし。卑き所に高きあり、高き所に卑きあり。ただに、虚遠を説て、人の耳目をおどろかさんとするは、其見所あさし。ある人いふ、「此『中庸』の書は、性命

4 a

の理を説たれば、初学のしる所にあらず。これを論ずるは、等をこゆるとて、先儒のいましむる所なり。ただ『小学』より入べし。これ一往はことわりなれど、時をしらぬなり。古の聖賢は時に随つて教をほどこす。このゆへに、堯舜は中と説き、孔子は仁と説、子思は天命と説、孟子は四端と説、其むねは一なり。中ごろより、老、莊、列、楊朱、墨翟の諸子おこり、儒者の内にも、古の聖人の教に、ややことなるもあり。其説広大にも精微にも説、見る人きく人眩耀せしむ。世に美質の人あらん、平常孝弟忠信を道としつとめ居らん、たまたま此等の説を聞て、おどろき喜び、これに帰し、無上道とお

4 b

もひなし、孝弟忠信は、瑣細淺近、經生の常談とそしり
 なみ*する者あらん。これ聖人性命の蘊をかりにもしら
 ざるによれり。然れば、『中庸』の書を見て、大やう天
 道性命といふことを見聞し、人道の本はここにあり、か
 の朦朧恍物たることにあらず、目にもふるる物、皆実理な
 りといふ事をしらせ置べし。此意は、呂東萊の説*にも
 見えたり。たとえば、弓を射るもの、容貌射方の礼法に
 かなふべきは本よりのことにて、的のあり所をしらざれ
 ば、目をつくる所なきが如し。初学者に、先、性命の理
 の的を一目見せをくべし。然らば多岐旁経(左…わきみち
 のまよひなく、人倫の道に純一)(左…もっぱら)なるべし。
 ただ願はくは、

【校勘】○なみ 懷徳堂文庫本は「など」に見える。

【注】○呂東萊の説 呂東萊は呂祖謙。実理を強調して
 いる「太学策問」(『東萊呂太史集』巻五)を言うか(『呂
 祖謙全集』第一冊(浙江古籍出版社、二〇〇八年)所収)。
 あるいは、『近思録』中にあるか。

5 a

世の人、人倫の道に純一ならば、君に忠し、親に孝し、
 夫婦むつまじく、兄弟相したしみ、朋友たがひに信あり
 て、風俗すなをにあつく、人々をのれが居る時に随ひ、

分在に應じ、心にひがめる事もなく、身によこしまな
 らん*を。もし、此書を見ん人、ひとりにててもことはり
 とおもひ、その身に補あらば、やつがれが太平の御世に
 むなしくいけりとせざらんことをおもふのみ。よりて今
 『中庸』の首章にもとづき、くだくだしけれど和文をも
 てしるし、おろかならん人にも、人の道といふことをし
 らしめんとおもふのみ。漢文をよみとかん人は、先儒の
 諸書にてさとし給ふべし。

【校勘】○らん 懷徳堂文庫本はこの後に「こと」の挿
 入を指示する。

(5 b…空)

6 a

天命之謂^レ性、率^レ性之謂^レ道、修^レ道之謂^レ教。

此三句、この書の冒頭なり。語は三條にて、初に天
 より説出し、性とし、道とし、教とし、三句一直
 説降す。天の字、性・道・教三つの内にふくみたり。又、
 一篇三十三章に、此ころをおしわたしたり。『論語』*
 に、「孔子五十にして天命を知る」と見えたり。聖人
 だにかくの如きを、我ともがらいかで天命を知りてと
 きあかすべけんや。これ知るといふにあらず。『中庸』
 によりて、天命の字義をいふのみ。天とはいかなるを
 いふ。地上は、皆天なり。頭をあふぎ見るに、蒼々

たるは、積氣なり。天に形体なきにより、しばらくこれを擬して天といふ。ここにいへるは、これを

【校勘】○ことば 懷徳堂文庫本「ご」。○さんかでう

懷徳堂文庫本「さんでう」。○すじ 底本は「すぐ」に見えるが、懷徳堂文庫本「ひとすぢ」とあるのを参考に「すじ」とした。○あてて 懷徳堂文庫本「ぎ」。

【注】○『論語』 為政篇「五十而知天命。」(30 a (28 a) にも見える。)

6 b

いふにあらず。その天道をいへるなり。又、天理ともいふ。天道の文字は、『書経』『論語』に出づ。天理の文字は、「楽記」に出づ。およそ無声無臭、無形無言にて、をのづからなりゆくさま、人の知力におよばぬこと、これ皆天より出るところなり。『礼記』*に、「無為シテ物成ル、是天道也。已成テ而明ナル、是天道也」と孔子ものたまへり。積氣の天は、地をかねつつみふところによれば、森羅万象、皆天中の物なり。天をして天たらしむるは、これ『易』にいへる太極にて、言語にわたる所にあらず。聖人といへどもしらざる所ありとはこれをいへり。命とは、本上より下の人にいへ付ることをいふ詞なり。これをかり用ひて、天のいひ付

【注】○ちえさいかく 知恵才覚。○『礼記』 哀公問篇に見える。

7 a

給ふといふころなり。孔子、子思より先に、周の劉子といへる人、「民ハ受ニ天地之中ヲ一以生ズ、所レ謂命也*」といへるは、これをしめしたるなり。又、『礼記』の「祭法」に「大凡生ルニ於天地之間ニ者、皆曰レ命ト」とあり、『書経』*武王の言に、「惟天地ハ万物ノ父母」ともあり。およそ人より始め、鳥獸昆虫草木に至るまで、皆天のいひつけにて生ずる所なれば、「天命之謂レ性」といへるなり。この性、物によりて、それぞれに品かはりてあたへ給ふ。是天の至奇至妙なる所に、又是を鬼神ともいふ。造化といふもこの事なり。ひとつをあけていはば、松の木あれば、をのづから実を結び、地に落ち、陰陽の和を受て生出づ。生出るとき、外

【注】○民受く命也 『春秋左氏伝』成公十三年伝に見える(14 b、28 aに後出)。○『書経』 泰誓上篇に見える。7 b

*にあらず。いつまでも松なり。是、天の生々の道、松に在りては一定の條理あり。その松も、其しかる所をしらず。これ天の命ずるところなり。いかなる王

公のいきほひ、聖賢の知にても、小松一本生ぜしむることあたはず。ここには、人の道を説くゆへ、人の性上にていふ。然るに、人の性をつくせば、物の性をもつくす*とあれば、物の性も畢竟は、これに異なることなし。是物我一体*なる所、一貫の道*ここにあり。愚なる人のおもはんやう、人は父母の生むものなれば、天のいひ付にてはあるまじと。もとより生ずるは父母なり。然るに、父母の心に、子を生んとおもへど子なきもあり。さればこそ、王公貴人に、子の

【校勘】○にあらず 懷徳堂文庫本ではこの前に「の木」の二字がある。この方が意味はわかりやすいが、抄者が補ったものか蘭洲の原稿にあったものかは未詳である。○せいけん 底本では「せんけん」に見える（「先賢」と同義であるという意か）が懷徳堂文庫本は「せいけん」とあるので仮にこのようにする。

【注】○人の性をつくせば、物の性をもつくす 蘭洲は「天人事物一貫之図」という図を作っていたという（『蘭洲遺稿』に記述あり）。人と物が同じく天から理（性）を受けている（構造は同じだ）として並列して書かれたものだったのであろう。○物我一体 仏教に「物我一体」または「物我一如」という語がある（『佛教語大辞典』東京書籍、一九七五年、一三六八頁）ただ、『正蒙』誠

明篇第六の「我体物、未嘗遺。物体我、知其不遺也」の注などでは見える（『正蒙初義』）。

8 a

なきもあり。乞食は、子をほしともおもふまじけれどおほく生ず。又、知者を生んとて、かしこきも生れず。さればこそ、かしこき人に愚なる子もあり、おろかなるにかしこきもあり。父母より形をわかち、これを愛育する恩は、天とひとしく極りなけれど、其性の性たる所は、父母の知力の及ぶところにあらず。今あらたに池をほるに、虫一ぴきもなし。久しければ自然と魚生ず。生ずれば、常に見なれたるふなはえ*となり、鮒はえなれば、をのづからふなはえのわざあり。これたれの然らしむるや。天のしからしむるなり。これを気化*といふ。其後は形化*とて、魚より魚を生ず。されど、其生ずることはり*は

【校勘】○あいゆく 懷徳堂文庫本「あいいく」。

【注】○はえ 川魚。○気化・形化 気化は（何もないような状態から）最初に生物が生まれること。形化はその生物の形態がある状態で所謂生殖によって同様の個体が再生されること。気化は経書類には見えないが、宋学の注釈書では多く見える。形化は、語としては「莊子」齊物論篇にも出現する（直接的関係はない）。『二程

遺書』卷五「万物之始、皆氣化。既形、然後以形相禪、有形化。形化長、則氣化漸消。』『朱子語類』卷九十四(周子之書・太極図)「氣化、是当初一箇人無種後、自生出來底。形生、却是有一箇人後、乃生生不窮底。」○ことはり 理。

8 b

いつまでも天なり。然れば、人は天の生ずる所にて、父母の伝へとりてあたへ給ふとするべし。『易』*に「継ハレ之ヲ者善」とある、これなり。これゆへに父母によくつかふるは、即天につかふるなり。『礼記』*に「仁人之事ル親也、如レ事レ天。事ル天如レ事レ親」と見えたり。性の字、日本の先哲、よくこの道を心得て、むまれつきとよみ始められたり。何を生れつくとならば天徳を生れつくなり。これを徳性といふ。即、天理なり。唯、徳性のみならず、耳目鼻口、四支百骸に至るまで、其用をする所は、皆、性よりあらはるなり。故に、『孟子』*に「形色、天性なり」といへり。万物*皆性あれど、唯人のみ天徳を全*くす。『易』*に「成ハレ之ヲ者性」とある、これなり。上下内外、

【校勘】○万物 懷徳堂文庫本は「よろづのもの」という振り仮名がある。○全 懷徳堂文庫本は「また」という振り仮名がある。

【注】○『易』 繫辞上篇に見える。○『礼記』 哀公問篇に見える。○『孟子』 尽心上篇に見える。○『易』 繫辞上篇に見える。

9 a

精疎本末、皆、天のあたふるゆへ、万物之靈といひ、又、小天地*といふ。世に「一丁字をしらぬ常人」に、こころだてすなをに、行ひのよく、君子にほめらるる人あり。これいまだ道をきかざれど、其性はもと天と一体なるにより、しらずしらずに道にかなふなり。是いはゆる「百姓日用而不レ知*」なり。又、書をよみ学問する人に、心だてひがみ、おこなひあしく、常人にさへそしらるるあり。これは其性、天と一体なることを、真知をさるゆへなり。君子にほめらるる常人は、誠によみすべし。常人にさへそしらるる学者は、まことと笑ふべきことなり。

率性之謂道 性の字義は、もと生の字のころなり。

【校勘】○君子 懷徳堂文庫本は「くんし」という振り仮名がある。

【注】○小天地 『易経』の注釈書にしばしば見える。○百姓日用而不レ知 『易経』 繫辞上篇に見える。懷徳堂文庫本は「ひとびとひにもちいてしらざる」という振り仮名がある。

9 b

かくのごとく生れ出たる所をいふなり。かく生れ出たる
ところ、即、天なり。無為無言、湛然明證にて、
名づくべきやうなし。ゆへに、ただ生といへり。
『春秋繁露』*に董仲舒のいへる「如^キ二其生ノ之自然[、]
之資^一、謂^二之性^ト。性^ハ者、質也。云々」、これなり。
生れたるままにしたがひもてゆけば、皆道にかなふ。
よきを見てはよみし、あしきを見てはにくむ。これを
よみすれば、貴みて上にをき、これをにくめばいやし
みて下にをく。物のそだつるを見てはよろこび、やぶ
るるを見てはおしみかなしむ。さむければ衣をき、飢
れば食を欲す。ゆへに、さむき者にはきせ、うゆる者
にはくらはしむ。この道をもて、君臣、父子、夫

10 a

【校勘】○ほつ 底本は「ほり」に見えるが、懷徳堂文
庫本が「ほつ」に見えるのに従い改めた。
【注】○『春秋繁露』 深察名号篇に見える。
婦の間にまじはる。是、性にしたがふ所にて、人の
自然のありさま、すこしもつけそへたることにあらず。
『大学』にいへる明德もこれをさしていふ。心をいふ
にあらず。其性にしたがふの至極をいへば、その仁、
天の如く、其智、神の如し。裁成輔相*して、天地

神祇も、これにたがふことなし。ひろくいへば、天地
の外におしわたり、近くいへば、瞬息の間に存す。
かく大小多少のたがひあれど、性にしたがふはひとつ
なり。是を名づけて道といへり。たとへば、かの二葉
の松の生出たるを、その松の性にしたがひ、生たす
れば、日月に長じて、つるに雲をしのぐほどの大木と
なり、棟梁の用をなす。これ松の性を遂るなり。

【注】○裁成輔相 きりもりし助ける。『易経』泰卦象伝
に「天地交泰、后以財成天地之道、輔相天地之宜、以左
右民」とあり（財と裁は同音）、孔穎達疏に「相、助也。
当輔助天地所生之宜」と説明する（13 b、30 aに後出）。

10 b

もし、やや長ずれば、その枝をかがめ梢をとめ、繩を
もて引き、又はくりなどし、五かい六かいにこしら
へたる作り松は、松の性をそこなひたるにて、たるき
の用をもなさず。俗人はこれを見て、喜びほむれど、
こころあらんかぎりは、このまぬことなり。人の上に
も*かくの如くなるは、性にしたがふの道にあらずし
て、人為をもて天然を害するなり。道の字は、元来、
人の往来する道路なり。人あれば必 往来す。往来す
れば、必、一すちの道出来るなり。この道は、地上に
ある物なれば、いづくとても道ならぬ所はなけれど、

人の往来なければ、草生じて道見え。この道をかき用ひて、人の道は君父*。

【校勘】○にも 懷徳堂文庫本「にて」。○君父 底本はこの後に一行書いた後に見せ消ちしている。

11 a

に仕ふれば、忠孝の道あらはる。君父をすてて仕ふることなければ、忠孝の道あらはれず。夫婦、兄弟、朋友、皆この類なり。この道すぢは、彼名づくべきなき天理の性中よりあらはれ出づ。これを「率性之謂道」といへり。神代には、これを、伊弉諾・伊弉冉*のみこと、めおのことはりにしたがふとの給へり。めおとは陰陽なり。父は陽、子は陰、君は陽、臣は陰、夫は陽、妻は陰なり。よろづのもの、此めおの外にもる物なし。ゆへに、『易』*に「一陰一陽之謂道」と見えたり。二尊、此めおのことはりにしたがひ、御はし*らめぐらせ給ひてより、此秋つしまの国土定り、日の神生出させ給へり。これも又性にし

【校勘】○冉 底本、懷徳堂文庫本ともに「冊」に見えるが改めた。

【注】○『易』 繫辞上伝に見える。○御はしら 『古事記』上巻に見える。伊弉諾尊と伊弉冉尊はおのころ島に降り立って婚約を結び、天の御柱を立てて宮殿を建設する。

そして、柱の周囲をお互いに逆周りに回って、出会ったところでお互いを称賛し性的結合を行い、日本国土の大八洲となる子ども達を生んだと言う。

11 b

たがふの外ならず。この*性にしたがふを無為といひ、無事といふ。人間百のしわざあれど、性にしたがへば、為ることなきなり。世を治むるに万機の政あれど、道にしたがへば、為ることなきなり。これを、「動くに天を以てす*」といふ。性にしたがはずして、私智を用れば、有為となりて、道にあらざれば、天にもとるなり。天にもとれば、をのれを治むることも、人を治むることもなりがたし。孔子、『易』を説て*、「无^クレ思^レ无^レ為、寂然不^レ動カ、感^{ジテ}通^ニ天下之故^ニ」*との給ひ、又舜の天下を治むるを賛して、「無^{シテ}而治*」といひ、又みづから「我欲^レ無^レ言*」*との給へり。およそ至理に至りては、言語

【校勘】○この 懷徳堂文庫本「又」。○説て 懷徳堂文庫本「説き」。

【注】○動くに天を以てす 「動以天」。『周易程氏伝』卷二の无妄卦の注に「動以天为无妄、動以人欲則妄矣」とあり、『近思録』卷二（論学）でも引かれる。『朱子語類』卷二十七などにも見える。○无^クレ思^レ…感通天下之故

繫辭上篇に見える。原文「易无思也、无為也、寂然不動、感而遂通天下之故。非天下之至神、其孰能与於此。」懷徳堂文庫本では「无_レ思_レ无_レ為_レ、寂然不_レ動、感_レ通_二天下之故_一」と振り仮名が振られている。○無為而治『論語』衛靈公篇の「子曰、無為而治者、其舜也与」を指す。○我欲_レ无_レ言『論語』陽貨篇に「子曰、予欲无言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉」とあるのを指す。懷徳堂文庫本は「言」という振り仮名がある。

12 a

の及ぶ所にあらず。しかれども、性に率ふの外ならず。

修道之謂教

修むるは、人の家を修理すといふ修の字の心なり。往來の道も修理せざれば、あるはくづれ、あるはくぼみ、水たまりなどして、往來しがたし。人の性は、天と一つなれば、すこしも邪険なることなく、至平至直なれど、生れ落て、知のいまだひらけざる時より、世のならはしに引れ、見る物聞物につきて、すなをならぬくせづき、心にうつりきては、つるよからぬ事も出来れば、道にたがふことをまぬがれず。ゆへに、聖人これを修理する教をまうけ給へり。其要は、乳児の時

12 b

より、つねづねに修養すべし。孔子『易伝』*を作りて、「蒙以養_レ正、聖功也」との給へり。「正」とは、天に得る所の性の本来、正直なるものなり。嬰兒_{（まご）}意味の時より、其正直をうしなはざるやうにと養ふ。これ即_{（すなわ）}聖人の聰明をなす事功なりとなり。『列女伝』*には、母の胎内より教あるをいひ、「曲_{（まが）}礼_{（れい）}」*には、幼子には、つねづねにいつはりがましき事をいひ聞しむべからずといへる、みな此ことなり。古にありては、伊尹の語に「習_{（しゆ）}与_{（と）}性成_{（せい）}」*といへり。このころは、いとけなき子、外より来る習、内に在る性とひとつに混じて終に不義をするといへるなり。我が国に在ては神代に、め神の、を神に先だちてことあげし給ひし*を、を神のいまし

【校勘】○事を 後から挿入されている。

【注】○「易伝」 別名「十翼」。孔子の伝とされる「象伝（上下）」「象伝（上下）」「繫辭伝（上下）」「文言伝」「説卦伝」「序卦伝」「雜卦伝」の十伝を言う。○『列女伝』 卷一母儀伝「周室三母」の条に見える。『小学』立教第一にも「列女伝」曰、古者、婦人妊子、寝不側、坐不辺、目不視邪色、耳不聽淫声……と引かれている。○「曲礼」『礼記』曲礼上篇に「幼子常視毋誑」と見える。

○習^レ与^レ性成^ル 『書經』 太甲上篇に見える。○め神^ノことあげし給ひし (先の注の天の御柱の周りを回った後にお互いを称賛した時) 女の伊弉冉尊が先に声をかけたことが悪かつたために蛭子が生まれたとして、再度御柱を周り、今度は男の伊弉諾尊が先に声をかけたという『古事記』の下りを言う。

13 a

め給ひ、又はらひといふことあり。人々の過惡の事あれば、洗^あひすぎ、清^し浄^じにして、あとをひかじとはらるすつるの法あり。これわが国神の教なるべし。教も亦、術多^みし。聖賢^{せいけん}の人ありて、我を教へみちびく、これ教なり。天地万物のさまを見て、身になずらへてつとむるも教なり。古人の嘉言^{よきことば}、善行^{よきをこなひ}を書冊^{しよちゆう}上^うに見、又は伝聞^{でんぶん}に聞^きて、これにならふも教なり。あしきを見て、我もかくあらんかと、かへり見、慎^つしむも教なり。上に居ます人主^{きみ}、礼楽刑政^{れいらくけいせい}をもて、下をみちびき給ふも教なり。たとへば、かの松の長ずる時、あまりに枝^{えだ}しげければ、打すかし、湿^ぬをにくむ木なれば、高き所へ*

【校勘】 ○しよじよう 懷徳堂文庫本「せうせう」。○へ 懷徳堂文庫本「に」。

13 b

移^{うつ}し植^うえ、たをれぬやうにと木をそへゆひ、こやしなどすれば、松の性を全^まふするなり。およそ聖人、人の性にしたがはず、又は性の害^{がい}となることのあるを見て、天地人の間に教をほどこす。これ天の助^{たすけ}をなし給ふゆへに、天吏^{てんり}*といふ。天吏とは天の役人^{やくじん}といふころなり。『易』*にはゆる「裁^{さい}成^{せい}天地之道^{てんちのちう}ヲ、輔^ほ相^{さう}天地之宜^{てんちのぎ}」、これなり。ある人いふ、「その嬰兒^{えいご}の世の習^{なづ}ひにひかるとは、定^{さだ}めて其父母^{ちちはは}乳母^{にち}、又は婢^ひ僕^べなどの、すなをならぬ習ひのことなるべし。然らば、その人々に元来^{もとより}すなをならぬ性^{せい}あるなれば、人の性^{せい}善^{ぜん}とはいふまじきか。」しからず。其人々も亦この嬰兒^{えいご}の初^{はつ}の如^{ごと}し。この本^{もと}をおして

【注】 ○天吏^{てんり} 『孟子』滕文公下篇に、「無敵於天下者、天吏也」という文句が見える。○『易』 『易經』泰卦象伝 (10 a に既出、30 a に後出)。

14 a (13 a)

いへば、人の性はもとよりすなをなり。すなをなるは、即^{すなは}ち善^{ぜん}なり。其善に大小多少のしなあること、その人の面の如^{ごと}し。善おほきはかしこきなり。善少きは愚^ぐなるなり。愚なるをただちに悪^{あく}といふべからず、すなをならずといふべからず。ただうれふべきは、其おろか

なるより、事のよしあしを見わくることくらし。其く
らきより、あしきこともしらずして、それに移り行な
り。始よりあしきことをせんとおもふにあらざ。其
嬰兒、もし幸に父母・乳母・婢僕、皆かしこき人なら
ば、愚に生れつきたりとも、直なる愚といふべし。た
とへば、ここに竹の二本生じたらんに、その一つは、
幸によき所に

14 b (13 b)

出たるゆへ、よくすなをに長く長じたり。ひとつは、
かたはらに石瓦などあり、あなたにさえられ、こな
たにおされて、屈曲して生立たり。其屈曲したるを見
て、竹はすなをならぬものといはば、ことはりならん
や、ひがことなるべし。すべて論ずるに、『書経*』
の湯誥*に、「上帝降衷乎下民^ニ。若^シ有^ル恒性^ニ、
克綏^{スレバ}厥猷^ヲ、惟后」と見えたり。此ころは、
「上帝」とは、天を尊みていふ詞なり。「衷」とは、
中の字と同じ。「下民」とは、天に対していふゆへ、
天子より以下、庶人までをいふ。此「中」は、即、
劉子*のいへる「天地之中」なり。これを天下の人ご
とに降しあたえ給ふ。民人これを受けては「性」といふ。
此性は古今のかはりなき

【校勘】○書経 懷徳堂文庫本は「しよけう」という振

り仮名がある。○湯誥 懷徳堂文庫本は「とうこう」と
いう振り仮名がある。

【注】○劉子 『春秋左氏伝』成公十三年伝に見える（7
aに既出、28 aに後出）。

15 a (14 a)

ものゆへ「有恒」といふ。「猷」は道なり。其道を
身にやすんじ得給ふは、聖人なり。聖人は、即、天下
の君なりといへるなり。此四句、『中庸』の三條によ
く符合せり。ある人いふ、「道をいふには善といひ、
心といふに、ここに善も心もいはぬはいかん。」答で
いふ、性は生なり。もと名づくべきやうなし。孔子の
語に、「性相近也*」とも、「人之生也直*」とも見え、『書
経』には、「有恒性」とあり。戦国のころより、専ら
ら心を説て、性はあしき物といふ僻説おこりてより、
孟子始めて性は善といへり。これ『易』に「継、之
者善」といふ善にて、悪に対する善にはあらず。李
延平*のいへる「求善於未^ニ始^メ有^ル悪之先^ニ
而性ノ善

【注】○性相近也 『論語』陽貨篇に見える。○人之生也
直 『論語』雍也篇に見える。○李延平 李侗。この文
句は、『李延答問』巻下に見える他、明・羅欽順『困知記』
巻上などにも引かれる。「李先生曰、動靜真偽善惡皆對

而言之、是世之所謂動靜真偽善惡、非性之所謂動靜真偽善惡也。惟求靜於未始有動之先而性之靜可見矣。求真於未始有偽之先而性之真可見矣。求善於未始有惡之先而性之善可見矣。」

15 b (14 b)

可「見ル」矣」といへる、これなり。譬へば、金は山に在時は、ただ金なり。元來、眞贋の論なし。贋金あるゆへ、眞金の名出たり。しかるに、その贋金なき先の金を、善惡にわかちいへとならば、必善のかたに属す。惡のかたには属せず。性の本に善惡の名なければ、しるて名づくれば、善といはんより外はなし。ここには、天のあたふる所にていふ性なるゆへ、善をいふに及ばず。心といふは、人身中の一物にて、五官の一つなり。思慮運用する所にていふ名なり。性の発する所は情なり。よろこぶ物あれば、即よろこぶのみにて、他念なし。『易』*にいはゆる「利貞、性情なり」といへるにて

【注】○しゃうじん 正身。本物のこと。○『易』 『易経』 乾卦文言伝に「利貞者性情也」とある。

16 a (15 a)

尚内に属するを見るべし。よろこぶ物なれど得まじきものなるを、必得んとおもふは、心なり。これゆ

へ、心には打まかせがたし。ゆへに、孔子も「操則存、棄則亡」。出入無時、莫知^レ其^レ嚮、其^レ心之謂^レ歟」との給ひ、『書経』*に「設^二中^一于乃^二心^一」とあるも、心には、中の徳なきゆへ、ひがことにまよへばなり。性には、存亡出入のさたには及ばず。性にしたがふことだに手に入れば、心はをのづから正しきかたに出づ。別に心の工夫はするに及ばず。いにしへ、心には、制すといひ、正すといひ、格すといひ、操るといふ。これ心は事物上に奔馳運動するゆへ、たとへば馬を御するに、轡をゆるすべからざるが如し。かの「人心惟

【注】○孔子 『孟子』 告子上篇に見える。ただし、原文では、「操則存、舍則亡、出入無時、莫知其郷、惟心之謂與。」となつており、若干の異同がある。○『書経』 『書経』 盤庚中篇に見える。

16 b (15 b)

危」とあるもここをいへるなり。聖人の境に至りては、心は性に随ふゆへ、孔子*は「心の欲する所に従ふ、矩を踰ず」との給ひ、顔子*には「其心三月仁に違はず」との給へり。矩といひ、仁といふ、皆、性の極処なり。この二聖性命の理に順ひ給ひしを、心にて説給ふこと、尤^レ精妙なり。孟子よく性と心とをいふ。なら

べていへば、心は存すといひ、性はやしなふといふ。存すとは、はなたぬをいひ、養はそこなはぬをいふ。又、孟子*に、「君子所レ性*、仁義礼智、根タリニ於心ニ。其生色也睟然、見ニ於面ニ、盎ニ於背ニ、施ニ於四体ニ、四体不シテ言而喻ス」とあり。仁義礼智は約していへば、一の善の字なり。この善

【校勘】○性 懷徳堂文庫本は「トスル」という送り仮名がある。

【注】○孔子 『論語』為政篇に見える七十歳の境地。「七十而従心所欲、不踰矩。」○顔子 『論語』雍也篇に見える。「回也、其心不違仁。」○孟子 『孟子』尽心上篇に見える。睟然(すいぜん)はつやのある様。盎(あふ)はあふれる。

17 a (16 a)

性中(じやうちゆう)にありて、心の根本(こんぽん)たり。心(こころ)のみにあらず、顔色(がんしよく)手足(てあし)に至るまで、この性の善(ぜん)、皆(みな)至(いた)り及(およ)ぶときは、一言(ひとこと)いはずして、性の命(めい)を受けてさすとすとなり。これにて性(じやう)の差別(わかち)を見るべし。又、ただ心(こころ)のみをいへるは、おほくは性(じやう)のことなり。「養(やう)心(しん)莫(な)し善(ぜん)ハ、ニ於(お)り寡(くわ)欲(よく)ヨリ*」の類(るい)、見るべし。これは養性(やうせい)の工夫(くふう)なり。孔子(こうし)、子思(し)の時(とき)ならば、養心(やうしん)の語(ご)はあるべからず。孟子(まうし)も、世(よ)につれて心(こころ)といへるなるべし。おおよそ、六經(りくけい)の内(うち)、後世(ごせい)の如(ごと)く、心(こころ)を専(せん)らとし説(せつ)ことなし。『書經(しよけい)』の舜典(しゆんてん)

道心(どうしん)・人心(じんしん)の語(ご)あり。道心(どうしん)をかりに性(じやう)とし、人心(じんしん)を即(すなは)ち心(こころ)とすれば、此語(こゝのこゝろ)の意(い)はことわり至極(しごく)せりといへども、語(ご)のさま、堯(げう)

【注】○養(やう)心(しん)莫(な)し善(ぜん)ハ、ニ於(お)り寡(くわ)欲(よく)ヨリ 『孟子』尽心上篇(しんしんじやうしやうへん)に見える。○道心(どうしん)・人心(じんしん) 「人心(じんしん)惟危(い) 道心(どうしん)惟微(い) 惟精(い)惟一(い) 允執(いんしつ)厥中(くわくちゆう) (人心(じんしん)惟危(い)く、道心(どうしん)惟微(い)なり。惟精(い)惟一(い) 允(いん)に厥(くわく)の中(ちゆう)を執(しつ)れ)」とある。

17 b (16 b)

舜(しゆん)の時(とき)の人の口氣(くわつき)にあらず。後世(ごせい)、荀子(じゆんじ)如(ごと)き、性(じやう)をしらずして心(こころ)のみをいふ儒者(にゆしや)の語(ご)のまじりて入(い)たるなるべし。『論語(ろんご)』に、わづかに心(こころ)の字(じ)みつよつあれど、後儒(ごにゆ)のいふ心(こころ)の字(じ)のさばきにあらず。この『中庸(ちゆうちゆう)』の書(しよ)に至(いた)りて、心(こころ)の字(じ)、一字(いちじ)も出(い)でず。このおく*に「内省(ないしやう)ル* 不(な)レ疚(く) 無(な)レ惡(あく)ニ乎(こゝろ)志(し)ニ」といふ語(ご)あり。是(こゝ)に「心(こころ)に惡(あく)む」といふべき所(ところ)なるを、志(し)といへるは、子思(し)のことにおもふ所(ところ)ありて、志(し)の字(じ)にかへられたるなり。これにて、心(こころ)をいへぬをしるべし。おもふに、『莊子(さうじ)』*に、「中国(ちゆうこく)の君子(くんし)は、礼(れい)義(ぎ)をしりて、心(こころ)をしらず」といひ、荀子(じゆんじ)は、「心(こころ)を養(やう)ふは誠(まこと)より善(ぜん)はなし」といひ、告子(こウし)はただ心(こころ)を動(うご)かぬことをいふ。然(しか)れば、子思(し)の

【校勘】○じゆんじ 原文(げんぶん)では「しゆんじ」。「じ」に濁

点があるので尊重した。○ル 懷徳堂文庫本「ルニ」。
 ○志 懷徳堂文庫本は「ニ」という訓点がある。○と
 底本ではこの上に「こ」があり、左横に削除を示すと思
 われる。「」がある。懷徳堂文庫本は「ことと」に作る。
 ○志 懷徳堂文庫本は「こころざし」という振り仮名が
 ある。

【注】○おく 『中庸』末章の三十三章。○『莊子』田
 子方篇に「中国之君子、明乎礼義、而陋於知人也」と見
 える。○荀子 修身篇に「養心莫善於誠」と見える。○
 告子 『孟子』公孫丑上篇に「曰、敢問、夫子之不動心、
 与告子之不動心、可得聞与。告子曰、『不得於言、勿求
 於心、不得於心、勿求於氣』と見える。

18 a (17 a)

時に先だちて、諸子ただ心をときて性をしらぬと見え
 たり。性あることをしらずして、いかんぞ人の道をさ
 とさんや。これゆへ、子思、『中庸』を作る行文の間
 に心の字をつとめてはぶかれたりと見えたり。然れば、
 性学とはいふべく、心学とはいふまじきにや。これに
 よりて見れば、諸子の性と説くは性にはあらで心なり。
 陸王*の心と説くは心にはあらで性なり。程朱の心を
 いふは性と混じたり*。荀子*、人の性の習ひにおほ
 はれてよこしまなることをする*を見て、「性は悪な

り、其善は偽なり」といひ、告子*は「性は善なく不
 善なし」といふ、皆、性をしらず。老子は、「有レ物
 一混成、先^二天地^一生^ス*、又云、「道生^レ一、一生^レ二、
 二生^レ三、三生^レ万物^{」*}といふ。其意、天地も万物
 中の一物なりといへるのみにて、人はいかなるものと
 いふをいはず。聖人の道

【校勘】○これによりて混じたり 底本では貼り紙で
 挿入が指示されている。懷徳堂文庫本はその通り挿入さ
 れている。○陸王 懷徳堂文庫本は「りくわう」とい
 う振り仮名がある。○ことをする 懷徳堂文庫本「有を」。
 ○有レ物混成、先^二天地^一生^ス 懷徳堂文庫本「有レ物混成、
 先^二天地^一生^ス」。○道生^レ一、一生^レ二、二生^レ三、三生^レ
 万物 懷徳堂文庫本「道生^レ一、一、一生^レ二、二、二生^レ三、三、
 三生^レ万物[」]。

【注】○荀子 『荀子』性悪篇に「人之性悪。其善者偽也」
 とある。○告子 普通、「こくし」と読む。『孟子』告子
 上篇に「告子曰、性無善、無不善也」と見える。

18 b (17 b)

は唯^た天^{てん}と性^{せい}とにあり。ゆへに、『易』に「窮^{きう}理^り尽^{じん}
 性^{せい}至^し于^こ命^{めい}*」といへり。あらゆる千万の国土もここ
 にあり。あらゆる血気心智の属、乃至草木沙磧もこ
 の内にこもりたり。国に、大小、華夷のたがひあれど、

天をいただかぬはなし。物に、知愚、偏専のたがひあれど、性のなきはなし。然るに、同じく天をいただけど、大陽のてらさぬ土地には、人物生ぜず、同じく性あれど、性に率ふ道をしらねば、人の道に遠し。微妙、不測、広大、無窮なることにて、しかも眼前に行はる。世にこの天と性との外に何事あらん*。ある人いふ、「性は本体なれば、修行の手をつくべきなし。【校勘】○命 懷徳堂文庫本は「二」という送り仮名がある。○すなわし 懷徳堂文庫本「いしつち」。○ふしぎ 原文は「ふしき」。「不思議」を言うと考えて「ふしぎ」とした。

【注】○世にこの天と性との外に何事あらん 『蘭洲遺稿』に記述がある「天人事物一貫之図」はこの道理を図示したものであったのであろう。

19a (18a)

心は今日作用する所なれば、是によりて工夫するは端的*ならずや。「こたへていふ。しからず。性はもとより寂然不動*にて、内に主たり。外にある耳目、鼻口、四支、百骸、一すぢの毛髮に至るまで、いづれか天性の寓する所にあらざらん。皆々養ふべきものなり。心をもとりとむれば、此形骸を粗迹*とし、人事を幻妄*と見なし、これを保合*することなし。老

莊列の徒、形骸を土木にし*、人道を牛馬に同じふするの類、皆、これよりおこり、つるに天叙天秩*をやぶりうしなふに至る。これら端的になづみて、天本*を忘れたるなり。性を養ふの方は、この次*にいへる「戒」二慎

【校勘】○天本 懷徳堂文庫本「大本」。

【注】○端的 この場合は、頼るべきもの（よるべ）、事情の意。○寂然不動 『易経』繫辞上伝に見える（11bに既出）。○粗迹 懷徳堂文庫本は「そせき」という振り仮名の右にさらに「いらぬもの」とある。同様に下の「げんまう」の右に「まぼろし」とある。○保合 『易経』乾卦象伝に「保二合大和、乃利貞」と見える。○形骸を土木にし 「土木形骸」という語は『世説新語』容止篇に見える。形骸を否定する発言は『莊子』などに散見される（大教師篇「外二其形骸」など）。○天叙天秩 天の秩序。『書経』皋陶謨篇に「天叙有典、敕我五典、五惇哉。天秩有礼、自我五礼、五庸哉。（天は有典を叙するに、我が五典に敕る、五惇せんかな。天は有礼を秩するに、我が五礼に自る、五庸せんかな）」と見える。○この次 『中庸』第一章のこの後に「是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其独也」と見える。

19 b (18 b)

乎所^ニ不^レ觀^{*}、恐^ニ懼^ニ乎其所^ニ不^レ聞^ニ一^ヒ獨^チを慎^ツむ^一、これ修行の端的なり。孔子*の顔子に告給へる「非礼にして視聽言動することなき」もこれに同じ手段なるべし。心にかばりかばりの妄念閑思出ても、一たびこれを天性にかへり見れば、をのづから消散することなり。況や不觀不聞につつしむをや。もし、本につき性にかへり見ずして、ただ末に随^シひ心にもとむれば*、東に消て西に生じ、此に散じてかしくにあつまり、一生擾々として、腥上の蟻をさる如くなり。諸子は、心の物に奔馳するを制して、無心に至らんとす。常人は、心を悦ばしむるにおぼれて、性の本然を害す。唯君

【校勘】○所^ニ不^レ觀 底本では一点はないが、懷徳堂文庫本により補った(訓点は必ずしも完全につけられていない訳ではないが、下文と統一を図った)。○もとむれば 底本は「とむれば」「と」は「も」のようにも見える)に作るが、懷徳堂文庫本が「求むれば」に作るのを参考に改めた。○せい 懷徳堂文庫本「ナマダサキ」。

【注】○孔子 『論語』顔淵篇冒頭の「非礼勿視、非礼勿聽、非礼勿言、非礼勿動」を言う。

20 a 「十八」と「十九」の間にあり。丁数なし。)

子は、性を養ふて、心おのづから正し。心おのづから

正しければ、其よるこび樂しむ所、即、性の本然にて、孔顔の樂、ここにあり。性を養ふて心自ら正しとは、聖賢の上にていふ。学者、性を養ふこといまだ手に入らずして心は正しき方に出るものとおもはば、又、大にあやまるべし。性はいつまでもすなをなるものにて、養ひによりて全^クす。こころは、よきにもつき、あしきにもつくものなれば、打まかせ難^クし。たとへば、苗をそだつるとて、莠をさらざれば、こやしつちかふも、莠のかたにひきとられて、つゝに*苗の害をするなり。つとめて莠をかりさるべし。孔子の「克己復礼*」

と

【校勘】○こやしつゝるに 底本では貼り紙で追加する(以下の「苗の害」の前に「ならず」が消されている)。

【注】○克己復礼 『論語』顔淵篇冒頭に「克己復礼為仁」と見える。懷徳堂文庫本は「克^チ己^ニ復^ルレ礼^ニ」(振り仮名はない)に作る。

20 b

の給へる、これなり。「己」とは、こころのあしき方に出るにていへり。あしき方に出るのを*心が克^カすることあたはざれば、性に復^カすることあたはず。「礼」とはすなはち性なり*。さればとて、その性に復^カするも、心よりすることなり。水よく舟を浮^ウべて、又、よ

く舟をしづむ。世にかくの如きことおほし。もしあながちに善を修しだにすれば、悪はさらでもよしといはば、たとへば、医者いしやの温補うんほ*だにすればよしとおもひて、瀉涼しゃりやう*をにくみさらふ如し。病やまをさらずして温補せば、病をたすけて元氣げんき衰おとろふべし。道ちに志しざさんとならば、一かたにては、つとめて悪をさり、

【校勘】○が 懷徳堂文庫本「は」。

【注】○「礼」とはすなはち性なり 朱子学に特徴的な解釈。○温補うんほ・瀉涼しゃりやう 温補は、温める、補う。瀉涼は、くだす、冷やす。補瀉温涼という言葉もある。漢方医学における治療上の二つの重要な原則として、補瀉がある。虚には補法を、実には瀉法を用いる（『黄帝内经素問』三部九候論篇「実則写（瀉）之、虚則補之。」）（参考書・劉桂平・孟静岩主編『中医基本用語辞典』（東洋学術出版社、二〇〇六年）、大塚恭男〔ほか〕編『講談社東洋医学大事典』（講談社、一九八八年）。当時、儒者と医者とを兼業することが多かった。蘭洲の父の持軒も京都で儒学とともに医学を学んでいる（蘭洲著「持軒先生行状」（『鶏肋篇』所収）。蘭洲も漢方医学について一定の理解を有していたと思われる。

21 a (19 a)

一かたには、性を養ひて戒惧かいこんすべし。かく修行せば、

しるしを得ること、速すみなるべし。隋唐ずいとう已来、世の人心をいふこと専らなり。其時の儒者じゆしやといふは、おほくは記問詞章きもんしやう*、又は諸子の流りうなり。韓退かんたい之しといへども、中庸性命の学に明らかならず。ゆへに、性に三品ありなどいひ、心性の差別しやべつをわきまへず。陸象山りくしやうざん*、王新建わんけんけん*などは、まことに醇儒じゆんじゆといへども、世の風につれて、唯、「心々」といへり。心とのみいへば、先にいへる諸子の説せつに近ちかし。性といへば、本体をとむること親切しんせつにて、一物をすてぬ博約はくやく*の旨ほだにかなふ。程朱ていしゆの学、是なるべし。然るに、程朱も*心をいふことしばしばなり。

【校勘】○しゃうざん 懷徳堂文庫本「せうざん」。○も 底本は「を」を見せ消ちにして直す。

【注】○記問詞章きもんしやう 記問は記聞とも書く。蘭洲が、古書を暗記するだけの学や詩文を作るだけの学では儒者たるに足りないと考えていたことがわかる。○王新建わんけんけん 王陽明のこと。○博約はくやく 『論語』顔淵篇に「博学於文、約之以礼」とあるのを指す。蘭洲はこの両方を行うことが理想的だと考えていた。「孔子之教博約是已。後之君子乃或博焉、或約焉、非無約於博、又非無博於約。要之、博焉者博之先、約焉者約之主。博而卒之約者、朱子是也。終始於約者、陸子是也。」（『蘭洲遺稿』下「送安達精英

如江都序」
21 b (19 b)

これも世につれてなるべし。
道^{トハ}也者、不^レ可^二須臾離^一也。可^ハ、離非^レ道也。

此一節は、上を受て下をおこす言^{*}にて、しめてことなる義なし。道とは、性のあらはれて行はるる所なるゆへ、道にはなれのくことのならぬものなり。たとへば、水あればさむし。其さむきをはなれて外に水なし。火あればあつし。其あつきをはなれて外に火なきが如し。人と道と一体なることかくの如し。もしはなれるることならば、道といふべからず。鶏鳴ておき、手あらひ、口すぐより始め、人事をつとめ、夜に至りていぬるまで、皆、道の作用なり。これをすて

【校勘】○言 懷徳堂文庫本は「コトバ」という振り仮名がある。カタカナの振り仮名は抄者による附記で、字を明らかにするために附された場合が多いようだ。

22 a (20 a)

疎迹とし、別に道を求めるは、いはゆる驢^ろにのりて驢を求むる^{*}なり。

【校勘】○驢 懷徳堂文庫本の振り仮名は「ウサギムマ」。

【注】○驢にのりて驢を求むる 「騎^レ驢^レ覓^レ驢」という諺がある。

是故君子戒^二慎乎其所^一、不^レ睹、恐^二懼乎其所^一、不^レ聞。

此一節は、性に率^{したが}ふ工夫をいへり。およそ、人は事にふれ物にまじはる所にて、先、見ること聞ことあり。見聞すれば、或^{*}は其事にひかれ、心にうつり行ては、物に化して、つゝに此性をおほふの患あり。見聞せぬ所は、寂然不動、純粹至精、性の本体なり。この時に平常、養をくはふべし。その養はいかん。戒慎(左…つししみ) 恐懼(左…おそる)、これなり。ここにおゐて、戒 惧する故、見聞するところにて、をのづから道にかなひて、邪路に

【校勘】○或 懷徳堂文庫本は「アルヒ」という振り仮名がある。

22 b (20 b)

馳せず。是子思の立言、此にあり。そのよる所、又、他にあらず。『書経』皐陶の語に「同^レ寅協^レ恭和衷哉^{*}」といへる、是なり。「寅」も「恭」も、つしむなり。

「和衷」は、即、中和なり。かくいへばとて、目をとち、耳をふさぎて、戒惧せよといふにはあらず。見るは目の官、聞くは耳の官なり。一室の内に居るに、意をつけて見んとおもはねど、墻屋戸席の類は、をのづから目にかかり、人の言、鳥獸の声などをのづから耳

に入るものなり。ただ、目にかかり耳に入るのみにて、とりとむることなく、さそはるることなければ、不睹ふみず不聞ふきこにおなじ。畢竟ひつてつ、睹聞とみきこの二字になづむべからず。ただ、事にのぞみ思

【校勘】○こやうやう 懷徳堂文庫本「こやうとう」。○同レ 寅協ひなけい恭和衷哉 懷徳堂文庫本には「同レ 寅協ひなけい 恭和衷哉こうちゅうなるかな」と振り仮名がある。

23 a (21 a)

慮計校りよけいこうせぬ時をいへるなり。人の諸もろのしわざは、皆、見ると聞とより始まるゆへ、かくいへるのみ。事にのぞみて戒惧かいくするは、常つね人も知りたることなり。事にのぞまぬ時に戒惧かいくす。是これ乾けんの卦くわい「君子終日乾々、夕惕若せきじやく」、文言には「敬以直内けいよきちうち」曾子の「戦々兢兢せんせんけいけい」といへる類なり。又、仲弓ちゆうきゆうは「居敬きけい」といへり。「居」は、平居へいきよ平生へいせいをいふ。平生へいせいに敬けいをわすれぬなり。又、孔子の「言忠信、行篤敬ごんちゆうしん ぎやくけい」を、立たちにも行ゆにも、これをわすれぬなど、皆、この事なり。『礼記』には、すべて「君子毋な不レ敬か」ともあり、およそ聖賢せいけん誨諭へいよの格言かくげん、三省さんせい、九思きゅうし等とう、皆、平生へいせいの心得なり。其事ごじにのぞみて始めてしかるにあらず。此末こしすえに、「君子

【校勘】○とくけい 懷徳堂文庫本「とつけい」。

【注】○君子終日乾々、夕惕若 『易経』乾卦卦辞。○敬以直内 『易経』坤卦文言伝に「君子敬以直内、義以方外」と見える。○戦々兢兢 『論語』泰伯篇に「曾子有疾。召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云『戦々兢兢々、如臨深淵、如履薄氷』」と見える。○居敬 『論語』雍也篇に「仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎」と見える。○言忠信、行篤敬 『論語』衛靈公篇に「言忠信、行篤敬、雖蛮貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉」と見える。○君子毋不敬 曲礼篇冒頭に「曲礼曰、毋不敬」と見える。○三省 『論語』学而篇に「曾子曰、吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。与朋友交而不信乎。伝不習乎」と見える。○九思 『論語』季氏篇に「君子有九思。視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義」と見える。○此末 『中庸』第三十三章第二節。

23 b (21 b)

之所これ不レ可レ及者、其唯人之所不レ見乎」とあり、人の見ざる所は、其君子の胸中むねちゆう、徳性明堂とくせいめいどうにして、天と一体なるをいへり。子思、又、これを豫あらかじめすともいへり。あらかじめすとは、其事より前つかたに、意を用ふるをいふ。ひろめていへば、人君ひとみ平生へいせいに身をつつしみ、用を節ほじやくし、奢おごりをやめ、俟まちを貴たかみ、税斂ねんぐをうす

くし、倉庫を設け、五こくをたくはへ給ふは、凶年あらんををそれつつしみてなり。凶年の時、俄におそれつつしみたりとて、たくはへなくんば、何の益かあらん。人の身を持つも亦かくの如し。平生に養生をわすれぬゆへ、飲食色欲にのぞみて、過度することなし。此ころにて戒惧を修行

【校勘】○所 懷徳堂文庫本には「ト」という送り仮名がある。

【注】○豫す 『中庸』第二十章第十五節に「凡事豫則立、不豫則廢」とある。

24 a (22 a)

せば、たれしも道にそむかざるべし。これによりて見れば、程朱の敬の字を主張していへるは、むべなるかな。しかるに、もろこし明の末にいたりて、敬をきらぬにくむ儒者あり。昔殷の紂は、敬は行ふにたらずといへり。孔子*は「をのれを修めて以て敬しむ」との給へり。今、殷の紂の暴にならひて、孔子の教にそむくは、いかなるゆへといふをしらず。ある人いふ、「敬を甚主張していへば、古人のいへる無繩自縛 漢の如くにて、すこぶる寛裕の氣象なし。」答ていふ。然らず。敬の反は惰慢なり。惰慢にて寛裕ならば*、天下の棄物なり。『書経』、舜の言*に、「直ニシテ而温

寛ニシテ而栗」との給ひ、皐陶の言*に

【校勘】○らる 懷徳堂文庫本「る」。○ならば 懷徳堂文庫本「ならず」。○舜の言 懷徳堂文庫本は「舜の書」に見える。

【注】○孔子 『論語』憲問篇に「子路問君子。子曰、脩己以敬。…」と見える。○『書経』、舜の言 『書経』堯典篇に見える。○皐陶の言 『書経』皐陶謨篇に見える。

24 b (22 b)

「乱ニシテ而敬擾ニシテ而毅」といへり。これらを全徳とす。今ぞこの説の如くならば、寛猛相濟ふ*の道をしらずして、ただひとつの善柔佞媚の小人となるべし。かの火をいましむることをしらずや。家人にねんごろにいひつけ、昼夜をこたらず、しかるに風はげしく吹出れば、尚みづから見巡り、こころにかかるくまなくて、後やすくいぬ。このやすくいぬるところ、尤、寛裕の所なり。君子、莊敬なるを、小人より見るときは、しばられたらんやうにおもふべけれど、君子の胸中は、常に安平泰舒なり。今すこしも敬の心なく、かへりて無繩自縛漢とおもへるは、かの小人の腹をもて君子の心をはかるなり。大てい世俗の

【注】○寛猛相濟ふ 『春秋左氏伝』昭公二十年伝に、孔子の語として「政寛則民慢、慢則糾之以猛。猛則民殘、

殘則施之以寬。寬以濟猛、猛以濟寬、政是以和」と見える。「寛猛相濟」とまとまった語は『孔子家語』正論解で同様に孔子の言を引用する箇所に見える。

25 a (23 a)

の*人、放蕩(左…ばれたること)を好み、檢束(左…しまりたる)をきらふものなり。敬をにくむ学者*は、これ俗人をよるこばし、世にこぶるなれば、孔子のにくみ給へりし郷愿*の行ひなるべし。

莫^レ見^ニ乎^レ隱^一、莫^レ顯^ニ乎^レ微^一。故^ニ君子慎^ニ其^レ独^一也。

此一節、君子となり、小人となるの岐路なり。およそ人の見識、おほく膚浅にて、あらはれ見ゆる所のみ在意を用ひ、物を逐て修めんとす。内にかくれ、又はすこしきなることは、外より見えぬとおもひあなどり、戒惧(左…つしみおそれ)することなし。ゆへに、すなをならぬこと、我しらずに身につもり、終に性をおほひくりますに至る。是、小人のありさまなり。君子のこころは、隱微な

【校勘】○の(能) 丁替わりで重複が生じたか。ただ、底本、懷徳堂文庫本ともにあるのでママとした。

【注】○敬をにくむ学者 伊藤仁斎らを指すと思われる。蘭洲は、伊藤仁斎を批判した『非伊篇』の中で、仁斎を

評して「喜陳熟緩慢、略無摟拂之說」と言っている。すなわち、人にこびへつらう説で、自己を律する厳しさに欠けるというのである(『蘭洲先生抄書』でこの語を抜いた横に「ヌンメリトシテアタリサハリナキ」と書いている)。○郷愿 『論語』陽貨篇に「郷愿、徳之賊也」と見える。

25 b (23 b)

る所を、即見、顯なる所とさとし得て、戒惧し養ふなり。隱微とは、たとへば、草木の実の如し。草木の実は、外に殼あり、内に仁あり。其仁は内にあれば隠 微なり。其仁の中より芽出て後、幹(左…みき)あり、枝あり、葉あり。これは見顯なり。達人の慧眼より見れば、其仁の内に、連抱參天の大木の勢あるをしるべし。もし其仁をすこしにてもそこなひ、又はむしばめば、たとひ芽出ても、かしげちぢみて大木とならず、ゆへに隱微なる仁をよく持つべし。又、草木にこやしするも、このこころなり。枝葉につちかへば、益なく、かへりて害す。土中にかくれあらはれぬ根にこやしするによりて、よく

26 a (24 a)

盛 茂す。隱微の二字は、前節「不覩不聞」をさす。小人は、ここにおろそかなるゆへ、善を修し、不善を

さることあたはずして、小人たるをまぬがれず。ただ、君子はここに委しく意を用るにより、益君子の徳をなすなり。慎は即、戒慎恐懼なり。独とは、内にあるものは、人の見ざるのみならず、みづからも見聞せず、ここをさして、独といへり。『大学』誠意の章*に、此慎独をひかれたり。意の発する所にて説く*。『書経』*の「惟精惟一*、允執厥中」、これ戒慎慎独のしるしなるべし。皆是

【校勘】○説く 底本ではこの後に一行と三分の一ほどの空白（削除した跡）がある。○惟一 底本では行の変わり目で「惟惟一」と「惟」を重複させて、上の「惟」を見せ消ちにしている。

【注】○『大学』誠意の章 伝第六章に「…此謂誠於中、形於外。故君子必慎其独也」とある。○『書経』大禹謨篇に見える。

26 b (24 b)

性上の工夫なり。心となり、事上にわたりたる所にて、俄にこれを執らんとするは、これ子莫*がとれる中にて、真の中にあらず。『易』の艮の卦*、「其背にとどまる」も見聞せざる所にて養ふの手段なり。諸子の工夫には、見聞をはらひすつるあり。見聞より心を煩すによりてなり。是も亦卓識なり。聖人の道にては、

あらかじめ不観不聞に戒惧する故、見聞する所に、即道行はるとするなり。見聞をにくみきらふことなし。喜怒哀楽之未レ発 謂二之中一、発 而皆中レ節 謂二之和一。中也者、天下之大本也。和トハ*也者、天下之達道也。

【校勘】○トハ 懷徳堂文庫本「ハ」。

【注】○子莫 『孟子』尽心上篇に「孟子曰、楊子取為我、拔一毛而利天下、不為也。墨子兼愛、摩頂放踵、利天下為之。子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也、所惡執一者、為其賊道也、拳一而廢百也」と見える。孟子は楊子や墨子と違い、中庸を守つた子莫を評価しつつも、融通性がない点において不十分であると考えていた。○艮の卦 『易経』艮卦卦辭に「艮其背、不獲其身」(艮は止まる意)とあり、六五の爻辭に「中正」という語が見える。

27 a (25 a)

ここは、性の妙所をいへるなり。性は冲漠(左…しづかに、無朕(左…きざしなし)なるものなり。その物にふれてきざす所を情と名づく。此情に七あり。喜怒哀楽、愛惡欲なり。喜はよろこぶなり、怒はいかるなり、哀はかなしむなり、樂はたのしむなり、愛はいとおしむなり、惡はにくみきらふなり、欲はこのみねがふな

り。ここに四ついへるは、略していふのみ。この七の情、事物にふれ感じて動き出れば、その事物にひかれて、よろこぶはよろこぶにすぎ、いかるはいかるに過ぐ。七のものが皆同じ。過れば道にそむくやうになり来る。かの不観不聞の時は、この七つのもの、ひとつも出来らず、出来らねば過

27 b (25 b)

ることなし。ただ、湛然虚明なるのみ。これを未発之中といひて、天下の大本とす。これ万善のよりに出る大なる本なり。たとへば、天秤の両の盤に、銀も法馬もなき時の如し。この時は、整々平々たるのみなり。これにすこしのくるひなきやうにすべし。くるひなければ、銀をもち法馬をもちたる時、毫釐のたがひなし。

中の字は、もと象形(左…かたどり)の字なり。篆文は〇なり。〇は宇宙の象なり。一はつらぬく象なり。宇宙をつらぬくは、天地万物のよつて立所といふ意にて作りたる文字なり。猶、南極北極の天の枢となるる如し。彼は気をもつらぬき、これは理をもつ

【校勘】〇ほくきよく 懷徳堂文庫本「ほつきよく」。

28 a (26 a)
つらぬく。其実は一なり。此中の字、過不及に對する中にあらず。過不及は、過と不及と相對す、中に対せ

ず。その他は、上は下に対し、中に対せず、外は内に對し、中に対せず、左は右に対し、中に対せず、大は小に対し、中に対せず。中は對するものなく、ひとり別に位をしめて、天下の大本となる所、天理人性の妙所、実に堯舜禹湯周孔如き聖人の允に執り給ふところなり。劉子*は「民受*天地之中ヲ以生ず」といへり。人ごとに此中を得て性とすれど、これを養ふことなきゆへ、執ることあたはず。和とは中の徳の物に及ぶところなり。中の外、別に和あるにあらず。

【校勘】〇受 懷徳堂文庫本は「ケ」という送り仮名がある。

【注】〇劉子 『春秋左氏伝』成公十三年伝に見える(7 a, 14 bに既出)。

28 b (26 b)
中のすでに発する所にての名なり。節はもと竹のふしなり。竹の節はよきほどほどにならびあるものなり。中の徳のあらはれ出て、和順にして、それぞれに應じ、ほどよく、さはることなきゆへ、富貴にも行はれ、貧賤にも行はれ、夷狄にも行はれ、患難水火の中にも行はる。これを和といひて、天下の達道とするなり。天下二字の心は、天地の間にこれより外に本と道となしといへるなり。大とは、尊むこ

ころなり。達の字は、ゆきとどくをいふ。中節の中
の字、大本の中と同じ文字なれど、こころ異なり、
はづさぬをいふ。よきほどほどをはづさぬなり。達
道の道の字、率性の道の字

29 a (27 a)

と同じ字なれど、こころ異なり、行はるる道すぢなり。
性の養ひは戒惧なるゆへ、七情をいはず。喜怒哀樂は
情のわざなるゆへ、戒惧の義なし。戒慎恐懼を一字に
つづむれば、敬の字なり。又、欽の字なり。又、恭の
字なり。古より群、聖人の徳を称するには、必これ
らの字を用ゆ。しかれば、戒惧はおよその人のみにあ
らず、聖人も亦戒惧なり。堯舜の授受し給ひし「允
執二厥中」*は、即、この未発の中にて、大本なり。殷
湯の「建二中於民」*との給ひしは、みづからの執
中をおして人に及ぼし、天下の人、皆、性をそこなは
ずして、中に協はしめ給ふ。これは已発の

【注】○允二執二厥中 『書経』大禹謨篇に見える (26 a
に既出)。○建二中於民 『書経』仲虺之誥篇に見える。
29 b (27 b)

和にて、達道なり。過不及なきも中なれど、事の上
にて説くゆへ、中庸の徳と庸の字をそへたり。ここの*
中は性にていふゆへ、庸の字をそふるに及ばず。さて

中庸の徳をよくする人は、必、執中の人なり。執中
人は、聖人なり。然れば、中庸の徳をよくする人のす
くなきはことほりなり。

致二中和一 天地位焉、万物育焉。

致の字は、きはめつくすなり。をのが大本を十分に
きはめつくし、達道を十分に物におよぼしきはめ、す
べて物と我との間、すこしのささはる所なく、四達
八通し、大は

【校勘】○ここの 懷徳堂文庫本「ここに」。

30 a (28 a)

天地の外に満ち、小は微塵の内に入る、これを「致
中和」といふ。「天地位焉、万物育焉」は賛歎(左
ほむる)の詞なり。「致中和」は、聖人盛徳大業の然ら
しむる所、天地といへども、その裁成輔相にて、
天は上に位し、地は下に位し、『書経』に舜のの給へ
る「地平天成」*の如く、其中間に生ずる万物、皆皆、
其生を遂て、そだてやしなはるるなり。堯舜にていへ
ば、欽明執中の徳化の「光二被二四方」*格三于上下二
「黎民於變時雍」*「無為而治」*のさまなり。孔
子にていへば、内は、知命、耳順、從心、外は、
老安、少懷、朋信のさまは、性中の天地万物位育
なり。孟子は、これを「万物皆備二於我」*と

【校勘】○ほしやう 懷徳堂文庫本は「ふせう」に見える。

○光^二被^一 懷徳堂文庫本は「シ」という送り仮名がある。

【注】○裁成輔相^{さいせいほしう} きりもりし助ける。『易経』泰卦象伝の語に基づく(10 a, 13 bに既出)。○地平天成 『書経』大禹謨篇に見える。○光被^二上下、黎民^{れいみん}時雍 『書経』堯典篇に見える。後半は「黎民(国民)於い^{おほ}にvari^しり時れ雍ぐ」。国民は大いに栄え、また和合したの意。○無為而治まる 『論語』衛霊公篇に「子曰、無為而治者、其舜也与」とあるのを指す(11 bに既出)。○六十而耳順、従心 『論語』為政篇の「五十而知天命。六十而耳順、七十而従心所欲、不踰矩」を言う。○老安、少懐、朋信 『論語』公冶長篇の「老者安之、朋友信之、少者懐之」を言う。○万物皆備^二於我^一 『孟子』尽心上篇に見える。宋学のスローガンになった語。

30 b (28 b) いひ、又、聖人の徳を贊嘆して、「夫君子、所^レ過者化^レ、所存者神、上下与^二天地^一同^レ流、豈曰小補之哉^一」

といへる、これ天地位育のさまをいへるなり。この書、首章に天命をもて説出し、終りに「上天之載、無^レ声無^レ臭^一」を引て天に帰す。是、皆、天人一体、物我一理^{*}を示して、一篇を始終す。いはゆる一貫の理、至れりといふべし。

【注】○夫君子^一小補之哉 『孟子』尽心上篇に見える。

○上天之載、無^レ声無^レ臭 『中庸』の末章である三十三章で引かれる『詩経』大雅・文王の語。○物我一理 31 aに見える『孟子』の「万物皆備於我」の宋学的解釈。

31 a (29 a)

跋

つらつらおもふに、天地より始め、人畜草木沙磔に至り、其体たちて、其用行はる、道の発見にあらざるはなく、性の固有にあらざるはなし。もし、かれをいとひこれをとるは、ただ一己一心の上より見て、天と性とに本づかぬにより。世に道を学ぶ人おほけれど、ただ冊子上の論なり。これををのれが性にかへり見こむる^{*}。人まればなり。又、世の人、聖人の教ありとおもへるのみ^{*}にて、人は万物にすぐれて貴きものをあたえ置給ふをしらず。それ一家

【校勘】○ここむる 懷徳堂文庫本「こころむる」。

【注】○聖人の教ありとおもへるのみ 蘭洲は、荀子を批判する際にも、自分自身によい素質があることを自覚せず、ひたすら聖人の教に頼ろうとする考えである点を批判している。「荀子の説に、人の性は悪なり、善をするはいつはりなれば、誰聖人の教にしたがふべしといふ。いづれの儒者か聖人の教を貴ざらん、されどみづ

からの身に、教をうくる善性あるをしらずして、一味地に聖人聖人といふは、是聖人に道をあづけ置なり。〔二蘭洲茗話』上九)

31 b (29 b)

の主人たる者、其家に祖宗より持伝へ、又は父母の手なれ給ひし器物財宝は、一々によく覚え、やぶらじ、そこなはじ、失はじとす。今、学者として、天のあたふる所にて父母のとりつぎたるこの我性命はいかなるものといふをしらず、只、口に詩書礼楽のみをとくは、知者といひがたし。又、おもふに、もろこし、古よりの聖賢、人を憂へて、性を尽し、心を存し、己をよくし、物に接はる道をさまざま説置て、人をよくせんと願へる教の言、又、世を憂へて、家を治め、国、天下を平にする方をいひ置る言、いくばくといふをしらず。世々の先儒、これらを書写し、又

32 a (30 a)

は木にちりばめ、世にひろめ人をさとしみちびかんことを願ひおもへるに、すべてこれを講求し身に行ひ世におよぼす人すくなし。ゆへに、秦漢より明清に至るまで、やややすき世もあれど、三代のさまならず、かしこき人もあれど、聖主賢相といふべきもすくなし。しかれば、おほくの聖賢の書は、つゝに世に益なく、皆無用の長物(左…いらぬもの)となりて、笥の中にして置き、

しみのすみかとなる。畢竟は紙木をつるやすのみ。おしむべし、なげくべし。

(六元)

本稿は、科学研究費・基盤研究B「懷徳堂の総合的研究」(研究代表者・竹田健二、研究課題番号・二五二八四〇一二)による研究成果の一部である。